

イネカメムシ越冬状況調査結果について

令和8年3月26日
埼玉県病害虫防除所

イネの穂を激しく加害して不稔や斑点米を引き起こすイネカメムシについて、越冬場所と越冬量を把握するため越冬状況調査を行いました。

調査の結果、イネカメムシの越冬成虫が58地点で確認され、調査を行った101地点中の57.4%に達しており、広範囲で越冬していることが確認されました。落ち葉内や落ち葉の下、ジャノヒゲ株内で越冬成虫を確認できた割合が60~70%と高く、ススキなどイネ科雑草株元でも半数の地点で越冬成虫が確認されました。

また、越冬密度の把握を目的として調査面積を定めて実施した調査の結果、林内や林縁の落ち葉の下では1㎡あたり1.3~1.5頭であったのに対し、植え込みや生垣の下の落ち葉で10.2頭、ジャノヒゲ株内で9.7頭でした。イネ科雑草の株元でも10.6頭に達しましたが、調査地点数が限られていたなか1地点で密度が高かった影響と考えられます。

前年に比較し越冬成虫の密度は低下しているものの、広範囲での越冬が確認されています。令和7年度と同様、広域で適切な防除を行ってください。

1. 調査時期

令和7年12月1日~令和8年3月19日

2. 調査地点

県内19市10町

さいたま市(見沼区・桜区・南区・緑区・岩槻区)、川口市、鴻巣市、川越市、富士見市、毛呂山町、東松山市、滑川町、嵐山町、川島町、吉見町、本庄市、美里町、神川町、熊谷市、深谷市、寄居町、行田市、加須市、羽生市、久喜市、蓮田市、白岡市、春日部市、越谷市、幸手市、吉川市、杉戸町、松伏町

3. 調査方法

- (1) 前年の多発生地や周辺的环境を考慮して予備的な調査を実施し、イネカメムシ越冬成虫を確認した場所、もしくは確認できる可能性の高い場所を選定し、以下の手法で調査を実施。
- (2) 林地、林床、植え込みの下等から1地点につき3か所(各0.25~1㎡)の落ち葉を採取。採取した落ち葉内に潜入して越冬しているイネカメムシ成虫の個体数を調査。
- (3) 畦畔や法面などに生育しているジャノヒゲ株を対象に、30~50cm四方の範囲をかき分けて調査し、目視により越冬成虫を採集、計数。
- (4) ススキやオギ等の雑草の株元や立ち木の株元について、調査場所の状況に応じて20~60cm四方の範囲を調査し、目視により成虫を採集、計数。
- (5) 堤防や雑草地について、原則として1㎡の範囲の複数地点を対象にかき分けて調査し、目視により成虫を採集、計数

4. 結果

調査の結果、越冬成虫を確認した場所では全体として以下のような傾向が認められました。

- ①冬の季節風が当たりにくく、南側や西側に開けていて陽だまりになりやすい場所。
- ②落ち葉が堆積しており、乾燥しておらず適度な湿度が保たれている場所。
- ③表土が柔らかかったり、堆積物や落ち葉の腐植化が進んでいて膨軟な場所。
- ④厳冬期でも緑色の葉をつけているイネ科雑草の株元やジャノヒゲの株内。
- ⑤耕地や堤防などの開けている場所よりも、北側や東側に構造物や林がある場所。



公共施設付近サツキ植え込みの下に堆積した落ち葉を調査



水田北側の篠地下に堆積した落ち葉やジャノヒゲを調査



県施設内コノテガシワの落ち葉や腐植物下で越冬中の成虫



立ち木の株元、剥離・落下した樹皮下で越冬中の成虫



ジャノヒゲの株内で越冬中の成虫



オギの株元、新芽近くで越冬中の成虫

(1) 調査の内訳

調査場所	調査地点数	成虫確認地点数	同左割合(%)
落ち葉内・落ち葉の下			
林内	3	2	66.7
林縁	8	3	37.5
植え込みの下	21	14	66.7
生垣下	6	4	66.7
ジャノヒゲ共	4	2	50.0
構造物わき	8	3	37.5
その他	8	5	62.5
立ち木			
株元	12	8	66.7
ジャノヒゲ			
株内	19	13	68.4
雑草地・堤防等			
ススキ等の雑草株元	4	2	50.0
果樹カメムシ類越冬調査			
林内・林縁・植え込み下落ち葉	8	2	25.0
合計(地点数)・平均(割合)	101	58	57.4

(2) 越冬成虫の密度

調査場所	調査地点数	成虫確認地点数	同左割合(%)	個体密度頭/m ²
落ち葉内・落ち葉下				
林内または林縁	18	6	33.3	1.5
植え込み下・生垣下等	28	19	67.9	10.2
その他	20	10	50.0	1.3
立ち木の株元	12	8	66.7	10.0
ジャノヒゲ株内	19	13	68.4	9.7
雑草地(ススキ等のイネ科雑草)・堤防等	4	2	50.0	10.6
合計(地点数)・平均(割合, 密度)	101	58	57.4	7.2

※上表の落ち葉調査(林内・林縁・植え込み下)には果樹カメムシ類越冬調査8地点を含む。

(3) 越冬密度の年次間比較

調査場所	令和7年度		令和6年度	
	地点数	個体密度頭/m ²	地点数	個体密度頭/m ²
落ち葉内・落ち葉下				
林内・林縁	18	1.5	5	102.3
植え込み下・生垣下等	28	10.2	18	33.2
その他	20	1.3	19	25.9
立ち木の株元	12	10.0	0	—
ジャノヒゲ株内	19	9.7	19	243.9
雑草地(ススキ等のイネ科雑草)	4	10.6	6	14.5
水田内(刈株)	0	—	10	0.003



穂を加害する成虫



不稔被害



本種による斑点米

5. イネカメムシの生態と被害

越冬した成虫が6月下旬から7月上旬にかけて早期栽培の水田やイネ科雑草に飛来します。早期栽培水田では出穂前から成虫が侵入し、交尾・産卵を行います。また、7月中下旬以降は出穂期の水田に成虫が侵入し、穂を加害します。

出穂期～乳熟期に激しく加害されると不稔となり、登熟期の加害により基部斑点米が生じ、収量および品質を著しく低下させます。

6. 令和8年産水稻で注意する点

昨年に比較し越冬成虫の密度は低くなっていますが成虫確認地点率は大きく低下しておらず、広範囲で越冬しているものと考えられます。6月下旬以降水田内外を注意深く観察して侵入有無を確認するとともに、出穂期とその8～14日後の2回、必ず防除を行ってください。とくに、周囲の水田に比較して出穂時期が早い、または遅い水田は集中的な加害を受けるリスクが高いため、発生状況に応じて防除回数を増やす等の対応を取ってください。

また、集中的な加害を回避するため、地域内で出穂時期が極力揃うように作型・品種選定も十分に検討してください。